

甦れ東日本

このたびの東日本大震災による被災地の皆様には、謹んでお見舞い申し上げます。

皆様の安全と一日も早い復旧を心よりお祈り申し上げます。

三月十一日、三陸沖を震源とする大地震があり震度八が観測された。北海道から九州にかけての広い範囲で揺れに見舞われた。由良でも少し揺れを感じた。

地震の規模を示すマグニチュード（M）は九・〇で記録が残る一九二三年以降国内で最大と発表されている。

戦後最大の国難である。

近年では二〇〇八年の中国四

川大地震を上回る世界最大級の地震となり政府は緊急事態宣言を発令した。これは未曾有の国家的な危機でありこれを乗り切る為には官民、企業と市民、それぞの「信頼」という絆を結び続けなければならない。

翌十二日の報道では、死者六十四人不明五十七人と発表されているが五月十五日現在では、死者が一万五〇三七人、行方不明者九四八七人、避難者

一万六五九一人であり、言葉を絶する甚大な被害となつた。

三陸沖を震源とする大きな地震の後、東北各県を大津波が襲つ

た。

ガレキと海水の混じりあつた津波に漁船は次々と流され、濁流が人や家屋、乗用車、田畠をのみこんだ。

かけがいのない命を飲み込んだ。気が付いた。

気仙沼湾では第一回目の大きな津波は港の近くの魚市場では、三階の屋上に達する高さ、湾内は濁流が渦巻き係留していなかった漁船が次々と流された。

もうテレビの画面を正視することができなかつた。

この津波により東京電力福島原子力発電所の六基に送電が不可能となりプールで保管中の使用済み核燃料の冷却が不十分となり、燃料棒が壊れ放射能を現在も撒き散らしている。

この災害が一番ひどい。

日本海側も津波に無縁ではない。府（防災課）はM六・九が想定される福井県沖の若狭湾内断層で地震が発生した時、舞鶴で一一一、宮津で〇・八メートルの津波を予測している。

この地区は近くの原発から二十キロ圏内にある。

津波注意報や避難所の設定、危機管理体制の準備を急がねばならない。

No.142

ム民館だよ」

平成23年6月

宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

行事報告

主事 磯田 充亮

◎四月十六日(土)～十七日(日)
四方寿朗先生遺作写真展

四方先生がご逝去されて早や
一年が経ちました。

今回ご遺族からお世話になつた地域の方々にお礼の意味を兼ねて写真を見て、気に入った写真があれば受取ってほしいとの申し出がありました。

「父は好きな由良で、その半生を思うままに過ぎさせて頂き温かく見守つてくださった。父が撮つた写真を希望される方々に貰つていただけたら嬉しい。」由良地区公民館では関係する由良の歴史をさぐる会・由良力メラクラブ・宮津カメラクラブと協力して遺作展を開催しました。

遺作は由良をこよなく愛した先生が五十年間趣味のカメラで、地区内の行事や風景等を撮り続けた数万点の作品の一部を展示しました。

中には、駅前通りの桜並木、由良神社秋の例祭、地区運動会、由良岳、海、カモメ、又、新聞社の写真展で入選した作品や飛行機から撮つた由良全景等が展示されました。

会場には両日で、延べ五百名の方が訪れ、宮津、舞鶴等から友人、知人が多く来館されました。

会場内は四方先生のお人柄や偉大な功績を讃える声が多く聞かれ、特に持帰りコーナーでは古い写真を手にとり想い出を語る人、他界した人達を懐かしむ人達の声が会場いっぱいに拡がっていました。

皆様のお陰で展示された写真是全部希望者にお渡しすることができました。

写真をいただいた方は、自分達の想い出とともに、末永く四方寿朗先生を偲んでいただければ幸いです。

◎四月二十九日(金) 昭和の日 第四十五回由良岳登山

この登山は昭和四十二年(一九六七)元公民館長故四方寿朗先生が復活に尽力され今日に至っています。

これも参加された方々、登山道の整備に、今年もお世話になつた由良観光組合の方、他ボランティアの方々の御協力のおかげと感謝いたしております。

今回は前日の豪雨の影響が懸念される中、由良岳の中腹まで霧に包まれた肌寒い朝、多くの方々が集合してくれました。

由良小学校グラウンドには、舞鶴や宮津方面から多くの老若男女が参加され、中には、一年ぶりに再会し喜びあう人達や、「この時期、天の橋立を見たい」と姫路から参加の高齢の方もおられる等、年々他地区からの参加が増えるように思われました。

又、今年は六合目附近に間伐材の搬送用として新道が作られ登山道が寸断され、仮登山道が作られていました。その山道は細くぬかるみ、危惧していましたが、全員無事に下山したこと

い登山となる予定でしたが、今は午前十一時前、東峰の上空にあつた小さな黒い雲が周囲の雲を吸いこみ、見る見る巨大になり山頂を覆いつくし霰あられまじりの雨となり登山者は下山を早めました。

その後山頂に霧が発生、西峰では足下に霧が這い眼下の景色を順次消していき、周りは真白、西峰は雲の上に浮かんだような錯覚に陥りました。春先によくある現象で今日は雷雨、濃霧にならなかつたものの山で遭難する原因になつています。

登山は適した服装、装備の準備が必要と考えさせられました。

登山は適した服装、装備の準備が必要と考えさせられました。

又、今年は六合目附近に間伐材の搬送用として新道が作られ登山道が寸断され、仮登山道が作られていました。その山道は細くぬかるみ、危惧していましたが、全員無事に下山したこと

で安心しました。

今年は一五三名に登山証明書を発行しました。

由良小学校に着任して

由良小学校校長 小 奥 伊 善

今年の人事異動で、由良幼稚園・由良小学校の校園長として着任しました。「由良小学校へ転勤」と聞いた時、目の前に浮かんだ光景は、①由良小学校の玄関、②校庭の森の大きな木、③校舎から見える由良ヶ岳でした。これらは、昭和六十三年四月から平成五年三月までの五間の勤務の中で印象に残った場所でした。

由良小学校の玄関は、出会いや別れの場でした。当時の入学式や卒業式の写真撮影、同僚との写真撮影等、感動の場面はこの玄関の前にありました。大きな木や由良ヶ岳は子どもたちとの楽しい思い出の詰まつた場所です。大きな木は現在と変わらず由良小学校のシンボルとして存在していました。平成二年か三年かの記憶は不確かですが、JRのキャンペーンだつ

たと思うのですが、一度たくさん電気で飾られたこともありました。

由良ヶ岳については、今年も公民館主催で由良ヶ登山が行われました。当時も同じように四月二十九日に行われていましたが、今ほど多くの小学生は参加していました。いかどなかつたのではないかと思ひます。当時は連休の合間に、もしくは連休後に全校登山が行われていたからです。当時も現在と同じように異年齢の色別班をつくり、入学早々の一年生から六年生全員が、弁当、水筒、地域からいただいたみかんを持て由良ヶ岳に登りました。下山時には、途中でワラビやゼンマイをみんなで採り、それを売つて児童会活動の資金の一部としていました。

教師も児童も助け合いながら「由良小」として一つにまとまつ

ていった大きな行事でした。

由良小に着任してからさらに思い出したことは、庄内由良小との交流です。庄内由良の地名

の由来となつた歴史的な縁から昭和五十三年頃の両地区の歴史研究会（由良の歴史をさぐる会）の相互訪問から始まつた交流が、私の在任中に小学校の交流へと広がりました。平成元年秋に庄内由良小の要請に基づき、児童の絵画交流が始まり急速に交流が深まりました。平成四年には、庄内由良小の児童四名が宮津市由良の地を訪れました。当時の庄内由良小では、バスケットボールが盛んであった関係から、宮津由良小対庄内由良小の交流試合を行いました。庄内由良小の児童は大変上手で歯がたたなかつたことを覚えています。

由良に着任してから三ヶ月が経とうとしています。前在任時にお世話になつた方々や地域の方々に十分な挨拶が出来ないまま現在に至つてることをお詫びいたします。また、僅かな期間ですが、多くの地域の方や各団体の方のご理解とご協力をいたいでいることに感謝の気持

しました。ところが平成五年度の人事異動で栗田小学校に転勤となりました。大変残念だったことを覚えています。私の在任中に始まつた学校交流が、今も続いていることに感激すると共に、児童会担当として学校同士の交流に携わってきた者としてとても嬉しく思いました。来年は庄内由良を訪問する年であるとお聞きし、夢が十九年振りに実現すると思うと、今から胸を彈ませている次第です。

由良に着任してから三ヶ月が経とうとしています。前在任時にお世話になつた方々や地域の方々に十分な挨拶が出来ないまま現在に至つてることをお詫びいたします。また、僅かな期間ですが、多くの地域の方や各団体の方のご理解とご協力をいたいでいることに感謝の気持でいっぱいです。今後ともよろしくお願ひいたします。

そして、その翌年は本校が庄内由良小を訪問するということことで、児童会担当の私と飯田校長（当時）とで、「来年は一緒に山形へ行こうで。」と堅く約束

就任御挨拶

宮津市立栗田中学校長 嶋崎幹朗

この度の人事異動によりまして、宮津中学校より栗田中学校へ転任して参りました島崎です。微力ではありますが、精一杯頑張りたいと思いますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

栗田中学校には、五年前に二年間お世話になりました。当時お世話になつた方々に会議等でお会いし、懐かしく思うとともに、心強く思い、いろいろな場面で一緒にできること、また、歴史と伝統があり、教育にご理解のある栗田の地で再び教育に携わることができることをうれしく思います。

今年度、二十七名の新入生を迎える、全校生徒七十三名でスタートし、早二ヶ月が過ぎました。元気な声が飛び交い、勉強、部活動に意欲的に取り組んでいます。一人一人のニー

ズに応じた教育活動を展開するとともに、新学習指導要領全面実施の最終準備年度としてしっかりと対応していきたいと思います。

さて、京都府では、新たな時代に対応する計画として、新しい京都府の教育の基本理念や今後の推進すべき施策の方向性を「京都府教育振興プラン」つながり、つくる、「京の知恵」として示しました。今後十年間の京都府の教育の基本理念を示しています。教育振興プランの中には、これまで「生きる力」「知・徳・体」として表現された概念を「はぐくみたい力」として具体的に三つの力として表しました。その力は、

一 展開する力：夢と希望を持ち、生涯にわたって自ら学び、自らを高め、未来を見通し切り拓く力です。

二 つながる力：豊かな感性と情緒、人権感覚、道徳心

を身に付け、社会を担う責任を自覚し、自然、人、社会とつながり共生できる力です。

三 挑戦する力：自らの目標を実現するため、失敗を恐れず挑戦しつづける、強くしなやかな意思と、健康でたくましく生きる力です。

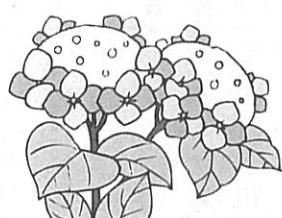
私は、かけがえのない存在として、愛され、見守られている。

・私は、ともに支え合い助け合う仲間として、信頼されていて、責任ある行動を期待されている。

本校の教育目標は、「ふるさとを想い、夢を持ち、自ら学ぶ、逞しい生徒の育成」であります。子どもたちが、安心や自信、誇りや責任感を持って取り組めるよう、また、そのような気持ちがより強くなるよう、家庭、地域社会と協力して教育活動を開いていきたいと思います。地域の皆様方の益々の御理解・御支援をお願いいたします。

こうした温かくて厳しい、周囲からの愛情や信頼、期待などに「包み込まれて」いるという感覚」こそが、安心や自信、誇りや责任感をもたらし、「未来を展望し」「自然、人、社会とつながり」「挑戦し続けて」い

こうという意欲を高めるもので、すべての子どもを愛情と信頼と期待とで包み込んでいくこと、すべての子どもが「包み込まれている」という感覚」を実感できるようにしていくことが、教育に関わるもののが務めひとつのあります。



就任のご挨拶

栗田中学校PTA副会長

枡 岡 典 幸

爽やかな初夏の季節になつてまいりました。由良地区の皆様には日頃からPTA活動につきまして、ご理解とご協力をいただきありがとうございます。特に資源回収や体育後援会賛助会員として、温かいご支援をいただいており、本当に心より感謝申し上げます。

さて、毎年PTA会長は、選挙内規により栗田・由良両地区から交互に選出されますので、今年度につきましては、栗田地区から選出されております。

この度、思いがけなく原稿執筆の依頼があり、副会長ではありますか、お引き受けすることになりました。

今年度のPTAの初総会におきまして、PTA・体育後援会の組織の改編が承認されました。生徒数の減少化により、来年度以降の本部役員を構成する

PTA会員数が、最高学年だけでは不足しており、定数の削減や全学年からの選出、役員の兼務を実行せざるをえない状況になつてきています。平成二十四年度からは改正された組織体制で、PTA活動・体育後援会活動を進めていくこととなりました。

このような時期だけに、これまで以上の地域の方々のお力添えをいただいて、生徒たちが少しでも充実した中学校生活を送れるよう、より一層の支援をしていきたいと思っておりますので、ご協力の程宜しくお願ひ致します。

PTA活動を取り巻く環境は今後ますます厳しくなると思われます。そんな中で、どのように活発なPTA活動を継続してお借りし、現状に合った環境

づくりを含め、皆さんと一緒に考えていただきたいと思つております。今後とも栗田中学校のPT

今思うこと

由良小学校・幼稚園PTA会長

岡 本 康 一

由良地区的皆様、由良小学校・由良幼稚園の、児童・園児に対しまして、日頃より温かく見守つて頂き、誠にありがとうございます。

また、PTA活動に対しまし

てもご支援、ご協力頂き、大変感謝しております。

この春、小学校に五名の新一年生、幼稚園にも五名の新年少さんを迎える事が出来ました。嬉しいかぎりです。

しかし、皆様もご存じの通り、近年児童の数が減少し、統廃合を考えざるを得ない状況となつております。

そんな中でも、子どもたちは、元気に明るく毎日を過ごしています。

子どもたちは、時代は変わつ

A活動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

ても、地域に育てられている事は間違いありません。是非、地域の方々にも、今まで以上に子どもたちに色々な事を教えてやつて下さい。もちろん私たち親は、それに甘えることなく精

一杯やつてまいります。

そして、今の子どもたちも自然に由良を思う気持ちが育ち、健やかに成長し、将来、由良の担い手となってくれる事を願つてやみません。

つながりの輪の中に

由良婦人会会長 渡邊弘美

由良地区の皆様には、日頃から婦人会活動に温かいご支援ご協力をいただき、ありがとうございます。

この度、思いがけなく婦人会長の職を仰せつかり、大きな戸惑いを感じています。もともとこのような職責を務められるものではありませんが、副会長の日比さん、庶務の大森さん、会計の千阪さんと一緒にになって微力ながら務めさせていただきました。

さて、私ごとですが、先日成人した娘と小さかった頃の話をしていました。

「うのおばちゃん。おばあちゃんと一緒に行つたことがある。」と答えていました。

いつも帰りが遅く土日もいなことがよくある私たちにかわって、祖父母と地域の皆様に育てていただいたことを痛感いたしました。ありがたく思いました。

三人の娘たちは、

「こんな親やのに、私らあ、ようまともに育つたよね。」

と言われていますが……。

また、八十歳を超えた父が外に出るのをおつこうがるようになったのですが、「おじいさん元気か?最近見んで。どうしとる?」

と、たずねてくださいました。

人が声かけてくれるで。」

また、高校生の末娘が幼かつた頃、一緒に散歩に出かけた時のことです。娘は、私の知らない人に次々あいさつをしていきました。親の私が幼い娘に

「今の人はどうこの人?」とたずねると、「うのおばちゃん。おばあちゃんと一緒に行つたことがある。」と答えていました。

東日本大震災で甚大な被害を受けられた東北の様子が連日テレビ放送されています。被災されながらも、お年寄りや弱い立場の方々を気使い助け合う人々の姿に頭が下がります。人と人とのつながり・地域のつながり

の中で被災された方々も前を向いて歩み始めておられます。私たちも由良の地で、先輩方が作つてこられたつながりの輪の一端を担えたらと思います。

婦人会は、今年度三支部となり、五十二名の会員でスタートしました。人数が少なくなり、仕事をもつて子育てや介護をしながらの婦人会活動です。婦人会が今年どれだけ地域に貢献お手伝いができるか分かりませんが、皆で力を合わせて頑張りました

いと思います。また、地域貢献以外に、婦人会会員が楽しく集うことを目的に、五月二十九日

地域の中で子どもたちが育ち、地域の中で豊かに老いていく、幸せなことだなあと想います。

にクラフトテープを使った籠作り、七月三日にヨガを計画しています。「集まれば元気!」を合言葉に、美しく、しなやかにしたたかにいきたいと思いま

就任のご挨拶

由良子供会連絡協議会会长

蒲原順一

青葉が茂るすがすがしい季節になりました。この度、由良子供会連絡協議会会长を務めさせて頂くことになりました。当協議会に対しましては、これまで地区会長という立場で何度も参加させて頂きましたが、今回協議会会长という大役を務めることがあります。何分にも力不足ではあります、精一杯取り組んでいきたいと思いますのでよろしくお願いします。また、日頃は子供会連絡協議会の活動に対し暖かいご支援とご協力を賜りまして有難うございます。

さて、子供会を取り巻く現状をみると、ここ数年来の課題でもありますが少子化や若年層の地区外への流出等により子どもの人数が年々減少しており、子供会活動の運営が難しくなつて来ています。中でも各地区単独での活動が厳しくなつております。地区によつては行事の規模を縮小したり、又一部では複数地区合同での実施という行事も出て来ています。

この傾向は今後益々強くなつていくと思われます。よつて当協議会の果たす役割も大きくなつていき、今後は各地区間の連携をより密にし、協力し合つて活動していくければならぬと想っています。



す。

由良地区の皆様、昨年同様の力添えをいただきますよう、よろしくお願ひいたします。

そんな中五月十五日(日)には、恒例の親子遠足を由良地区合同で実施し姫路セントラルパークへ行つて來ました。

この行事についても以前は各地区単独で実施されていましたが、会員の要望もあり昨年度より合同で実施する事となりました。

当日は天氣にも恵まれ、親子で総勢一〇一名の参加となり大変にぎやかに行なうことが出来ました。合同で実施する事により、子ども達にとつてはより多くの友達と楽しむ事が出来て良かつたのではないかと思つております。

今後とも子ども達を暖かく見守つて頂きます様お願い致します。また子供会活動に対しましても変わらぬご理解とご協力を賜ります様、かさねがさねではあります、よろしくお願ひ致します。

いと考へています。

そんな中五月十五日(日)には、恒例の親子遠足を由良地区合同で実施し姫路セントラルパークへ行つて來ました。

また少子化は防犯の観点からも影響が出て来ています。昔は登下校についても下校後の外出時にも多人数で行動出来ましたが、現在は非常に少人数での行動となり、保護者にとつては心配なところです。

第45回 由良ヶ岳登山

由良ヶ岳登山

5年 大石真也

四月二十九日金曜日に由良ヶ岳登山をしました。ぼくは、初め、学校に行つたらりようきくんと、よしきくんと、かいえくんがいました。ぼくは、父さんと、兄ちゃんと来たけれどいっしょに行きました。ぼくは、友達といつしょに行くときめていたからです。後からともや君とゆうき君としようご君が来ました。



み場で水を飲みに行きました。頂上に着くと、べんとうを食べました。おいしかったです。そのあとおかしを食べました。おりる時、土がどろどろでした。

また登ろうと思います。たのしい山登りでした。

由良ヶ岳の一合目に着きました。山の中に入ると植物などがあつたので見ながら行きました。見た事がない植物ばかりなのですごいなと思いました。一合目から二合目は、けつこう長かったのでつかれました。と中で休みました。ぼくがみんなで飲みました。みんながいるか確かめました。細い道があつたのであぶなかつたです。飲み物をもつてきてない人がいたので水を飲む場所へ行きました。新しい道があつたのでおもしろかったです。木が置いてありました。そこをわたつて上に

がんばつた登山

5年 岡本凌輝

ぼくとかいえくんとよしきで学校に行つて少しだらしんやくんとしようごくんとゆうきくんとともやくんが来て体そをうをしてから由良ヶ岳にむかいました。ぼくたちは一番の人をぬかして一位になりました。けれど「つかれるからやめておこう。」と言つてゆつくり歩きました。

上がりました。道が分かれています。どこが本当の道か分かりませんでした。どろがあつてのぼりにくかったです。ゆうきくんが変な所を歩いていました。上へ行けば行くほど草がおおくなつ

ました。それから出発しました。最初は、ぼくたちが一番でした。でもどんどんぬかされていました。でもどんどんぬかされていました。と中でスポーツドリンクを飲みました。みんながガムをあげました。ゆうきくんとしようごくんは、お茶を持ってきてなかつたから、と中で水飲



てじやまでした。新しいかんばんがありました。

九合目に来て

「やつたもうすこしだ。」

とみんな言いました。ぼくはちよう上にはやくつきたいので本気で走りました。かんばんがあつて、二つのコースがあつて一つの道はきよりはみじかいけどきゆうで二つ目の道はきよりは長いけどきゆうではない道でした。ゆうきくん以外はきより

が長い方をえらびました。なぜかと言うとぼくは本気で走つてつかれたからです。去年も由良がたけを登つたので見おぼえがあるとおもいました。また走りました。ちよう上についたらつかれました。おべんとうを食べました。おいしかったです。およつもおいしかったです。交かんしたりしました。

山を下りて帰りました。つかれただけどまた登りたいです。

二年ぶりの由良ヶ岳

5年 小 室 麗 妃

四月二十九日金曜日、私は二年ぶりに由良ヶ岳にのぼりました。

雨で道がぬかるんでいたりしておもしろかつたりあぶなかつたりでした。

今年は六年生のはるなちゃんとあづさちゃんとゆうきちゃんとはるかちゃん達とのぼりました。列の後ろからお母さんものぼりました。

途中の道を工事していたので丸太道になっていたり、前日の

おりてきたときわたしは

三十九番で、お母さんは四十九番で十番ちがいでした。お母さんがおりてくるまで、おやつこわかんをしたりしていました。

由良ヶ岳登山

5年 中 西 智 也

四月二十九日に由良ヶ岳登山に行きました。まず最初に学校に行つたら、りょうきくんといえくんとしんやくんとゆうきくんとよしきくんがいました。

そしてさっそく登りました。最初に一番早く登り出しました。しかし中学生や他の学校の人たちにかなりぬかされました。りょうきくんが国民宿舎まできた時「ゆっくり行こ。」と言いました。

そして山に登り出しました。最初はあまり急ではなかつたですが少し歩いていたらだんだん急になりました。すごく足がつかれきました。少し休みましたが。

来年はお父さんもいつしょにのぼれたらいいなあと思いました。

来年はお父さんもいつしょにのぼれたらいいなあと思いました。

り出しました。たくさん登つたら休けいしながら行きました。登つていると中で上山先生に会いました。ぼくたちは水のある方に行きました。山水が流れています。ゆうきくんがお茶がないから行きました。そしてまたもどつてきて山を登り出しました。そして別れ道みたいな所に行きました。二回もありました。それがすぎたらちようじようにつきました。ごはんを食べました。ごはんを食べて終つた。

らおかしを食べたり話していました。それがすぎたらちようじようにつきました。ごはんを食べました。ごはんを食べて終つた。アクリアスを飲みました。おいしかったです。また登

由良ヶ岳登山

5年 室澤戒依

今日、ぼくとりようきくんで由良がたけ登山にいきました。まず、小学校に行つたらしんや君達がいました。しんや君達と由良ヶ岳登山にいきました。

由良ヶ岳に入りました。ぼく達は、しようご君とりようき君としんや君とともにや君とゆうき君とよしき君と登りました。ぼく達は一合目まで、ゆっくりと歩いて登りました。一合目に着いたらちょっと休けいしました。どんどん歩いて行きました。今度は、なぜか二合目に着くのが長く感じました。よしき君が、「まだなん一合目。」といつたらつきました。ぼく達はそれから一生けん命になつて、三合目までにつきました。ぼく達はぜえぜえと言ひながら給水を取りました。ぼく達は、また登りはじめました。一生けん命になつて登つていつてぼく

は、水を取りませんでした。それから一生けん命になつて歩いていくと、と中でどうだらけの所がありました。ちょうど木が倒れていたのでそこは木の上を歩いていくしかありませんでした。そこをぬけたら、しようご君がめちゃくちゃそうになりました。ともや君もえらそ

つかれたけど、のぼりきりました。
登山を友達と登りました。

四月二十九日に、由良がたけ

最初は、どんどん登れて、今年、順調に行けるんじやないかと思つていました。だけど、のぼるたびにつかれて、へとへとなりました。

「まだかな。まだかな。」とずつといいながら、ぐいぐいと登つていきました。そして、みんなで、「あとちょっとだから、がんばろう。」とか「だいじょうぶ。」など、あたたかい声かけがたくさんありました。私は、

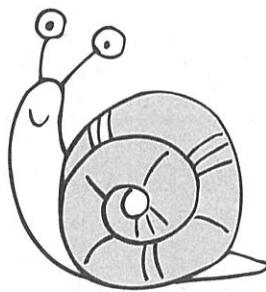
に行こう。」

と言いました。ぼく達は道がドロドロだったの、くつをどんどん登つて行きました。給水ポイントがあつてもゆうき君は水を飲みませんでした。給水

計を見ると、ちよう上についたのは十時ぐらいでした。ごはんを食べてけしきを見たら、ものすごくきれいでした。ものすごく楽しかったです。

のぼりきつた

6年 岡本遥



といひました。給水を取るためです。それを何回も何回もくり返しながら、やつと九合目まできました。上山先生もいました。ゆうき君が、「のどがからからやから水飲み前から由良がたけ登山で、みん

ながあたたかい声かけが、できるいいっぱいあるので、私は好きです。
やつとちょうど上につきました。がんばりました。
だけどお弁当を食べていると雨がふつてきて、いそいでおりました。
そしてやつとおりました。とてもつかれたけど、楽しかった

楽しかつたな 由良ヶ岳登山

6年 小林美香

四月二十九日に由良ヶ岳登山に登りました。この日は、朝は、すごく晴れていい天気でした。

八時半に由良小学校に集まつてラジオ体そうをしました。それが終わると道へ入つていきました。

と中で「つかれた。」となつたけど、いい景色や、いい空気で気持ちがよく、元気が出ました。

少し登ると、元気なおじいさんおばあさんに出会いました。「この由良ヶ岳は初めてで不安

だ」と言つておられたけど、ずんずんとなれた足どりだったのですごいと思いました。

頂上へ着くと、いい景色を見ながらお弁当を食べました。お弁当がすごくおいしく感じました。少しいたら、雨がふつてしましました。なので、おりました。

おりるときは、すごくすべりやすくなかったです。でも、すこし楽しかったです。

いい景色が見れすごく良かったです。

由良がたけとざん

6年 中西 夕紀

四月二十九日に由良がたけとざんがありました。わたしは今年で五年目でした。前日の雨ですこしどろどろでした。

いよいよとさんのスタートです。わたしは、こくみんしゆく

すこし道がかわつていてびっくりしました。のぼつているときのけしきがとてもきれかつたです。やつとちようじょうにつきました。今年はあまりきゅうですごいと思いました。

ちようじょうについて、お弁当を食べました。おいしかったです。するとあめがふつてきましたので、いそいでかたづけたです。

年は、クラブがなかつたら、ゼンを食べました。おいしかったです。するとあめがふつてきましたので、いそいでかたづけたです。

小学生最後の由良岳登山

6年 濱野颯人

ぼくは、少し前からぜん息の体調と天気が心配でした。それは四月二十九日に待ちに待つた由良がたけ登山があるからでした。

「今、ぜんそくがでないよう体調を整えて絶たい登るぞ。」と思つていました。そして、前日の天気予報を見て、「明日は、晴れ。やつたあ。登れだんがたくさんありました。くだるところがあつたのでつかれしみ。」と思つていました。

二十九日当日は、もちろん晴

て、おりました。すごくどころだったので、三回ぐらいすべつてしりもちをついていました。だんだんおりるのになれて、さつさとおりました。今年は、百三十七番でした。昨年よりはけいせずにのぼれたのでよかったです。

やくおりてよかったです。来年は、クラブがなかつたら、ゼンひみんなといつしょに由良がたけをのぼりたいです。

れてくれました。ぼくは、張りきつて、「行つてきます。」と言つて、お父さんと学校へ向いました。

いつしょに登る六年生三人と一緒にいちやんもそろいました。

開会式の後、体そうをして、いよいよ出発です。

始めの山道は落葉が多かつたです。五合目くらいからしや面も急になってきて、道もすべりやすかつたけど、みんなでがん

ぱって進みました。

今度は、七合目あたりからは、丸太があつたり、どろ道みたいで、すごくすべてこけそうでした。それでもがんばって、すこしづつ頂上に近づいて、十一時前には頂上に着きました。すごくつかれました。でも、景色を見たら、すごい絶景で最高でした。お父さんのけい帶で、家にいるお母さんに電話をして、外に出てもらうと、家の前の空地の真ん中の辺りに豆つぶよりも小さな点があつて、それがお母さんとお姉ちゃんでした。そして、電話を切った後お弁当を食べました。すると急に雨がすごくふってきました。小屋があると言わされたので行こうと思い

ましたが、雨が弱まつたのでぼくたちは下りました。みんな丸太の所がこわかつたです。でも、何回もすべつてころびかけたけど、そこを乗りこえました。

下山は、休けいなしで、下りてきて無事に国民宿舎まできたので、ぼくとお父さんは、ここでみんなと別れて帰りました。

ぼくは、三才の時に初めて登つて、その後五年間は、ぜんねんで登れなくてすごく、ざんねんでした。でも、四年生からは、がんばつて登れました。今

そくで登れなくてすごく、ざんねんでした。でも、四年生からは、がんばつて登れました。今

年も、春休みに入院したので心配だつたけど、小学生最後の由良岳登山が出来てすごく良かつたです。

合目三合目と登つていきました。今年は大人数で行きました。休けいは数回して、ちよつとしやべりながら登りました。五合目ぐらいになると、地面がベチョベチョになつていてくつがひつついたりこけそうになつたりして大変でした。新しい道になつていた所もありました。けつこうえらかたけど、あまり休けいせずに行きました。

たくさん登るとやつとのことで頂上につきました。

「やつとついた！」

と、私はうれしかつたので言いました。よく見るとちよつとくもつていたので雨が降るのかな、大丈夫かなと思いました。

ちょっと心配しながらお弁当にしました。しきものをしいて準備をしてみんなで食べました。すつごくおいしかつたです。楽しんで食べていてお弁当を食べ終わる前に、ポツリと雨が降つて来ました。

「ええ！おやつ交かんまだなのわくわくしながら、一合目に！」

由良岳登山でハーフニング！

6年 前畑 あづさ

四月二十九日に由良岳登山に行きました。おかしを前日に買っておいたのでもつて行きました。

私は、頂上でお弁当をみんなで食べておかしを交かんしたりするのが楽しみでした。わくわくしながら、一合目に

と言いました。楽しみのおやつ交かんは無しでみんなですぐに山を降りました。

と中で二回すべつたりこけたりしたけど、無事降りられてよかったです。

来年は中学生になるけど、これなら行きたいです。

平成22年度 宮津市人権標語コンクール優秀賞

思いやり みんなで持てば

幸せいっぱい



北国街道 消えた『七曲八峠』

京都丹後学会会長
丹後ふるさと観光大使

坂本与一郎

北国街道とは、宮津城下から、栗田峠・由良を通る宮津街道のことを云う。もっと具体的に云うと、宮津城下から海岸線に沿つて北東に向い、波路から良川をさかのぼり、河守を経て山陰道に合流する。現在の国道一七八号・一七五号線沿いの栗田峠を越え、由良からは、由良川をさかのぼり、河守を経て栗田峠を越え、由良からは、由良川をさかのぼり、河守を経て山陰道に合流する。現在の国道一七八号・一七五号線沿いの栗田峠を云う。

しかし、これも栗田峠のトンネルが明治十九年売間九兵衛の開削によつて通じてからのことである。

それ以前は、旧道といわれる宮津市惣から皆原、山中、新宮を抜けるルートであり、由良は七曲八峠という難所を抜けなければならぬ。

和泉式部と由良川街道

現在の宮津市山中（あえて地名といわなければならない。）丹後隱れ里の一つである。

和泉式部が二十歳年上の藤原保昌（丹後国司）に再嫁してき

て、保昌が都へ去つてから老残の身をかこつた場所である。栗

田浜から南へ街道を入つて山中村にさしかかると、そこに草庵跡があつて式部桜が残つている。『丹哥府誌』は式部の終焉地をこの山中とするが、一説には京都ともいわれている。没年も消息も不明なのである。

情念の人といわれた式部は、暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月どうたつた。

と、次の国守兼房と交際をつづけ保昌の館にいたときしのびこんできた男に歌つた歌が残つてゐる。

我のみや思いおこせむ味氣な
く人は行方もしらぬもの故。

（水上勉著「丹波・丹後」河出書房新社刊より）

同じ歌人の小野小町は普甲嶋の道を、丹波越えで五十河の里へ入つたであろう。

古くは間人皇后が丹波を越えて由良川を舟で下つた。

藤原保昌と和泉式部もこの道をたどつたであろう。

待つ人のいまもきたらば
かがせん

踏ままく惜しき庭の雪かな

外山（とやま）ふくあらし
の風の音きけば

まだきに冬の奥ぞしらるる

（和泉式部集）

未だ街道として整備されていない時代、旅人は河岸や海辺を街道として歩いた。

後世、この由良川沿いの風景は、三島由紀夫が名作「金閣寺」で描きたどつたし、丹後に遊ぶ山口瞳が好きだつた風景だといふ。もちろん森鷗外の名作「山椒大夫」の舞台でもある。七曲八峠（長尾峠）もしかりである。思ひがけない再会に我を忘れて語り合つた。

なげきたる身は山中から過ご

せかし

浮き世の中に何帰るなん

赤染衛門

曾禰好忠の由良川街道

丹後の国司勤務を命ぜられた

一人の三等官「掾」が、この川沿いを下る。曾禰好忠である。

歌人（曾丹集）として高名な官僚ではあるが、そこは宮仕え、勤務を命ぜられるまであつたのだろう。府中にあつたであろう国司に出仕するためにこの街道を通った。

**由良の戸（門）を渡る舟人
かじを絶え
ゆくえもしらぬ恋のみちかな**

（新古今集）
京都郊外三国峠（九五九メー

トル）から発して全長一四六キロ「丹波を越え由良湊から日本海にそそぐ、この川と海がせめぎ合うところが「由良の戸」。

丹後風土記残欠にもその地名がある由良湊「由良の戸」が紀伊の枕詞であるため長年御当地論争があつたが、曾禰好忠が丹後掾じょうであることから、この地であるとほぼ結着がついたからだ。歌碑が森鷗外の文学碑近くのお稻荷さんの境内に建つ。

明治二三年奈良海岸道路が開通することによつて七曲八峠は、嶽村の廃村もあつて忘れられたようにさびれていく。

官僚ではあるが、そこは宮仕え、勤務を命ぜられるまであつたのだろう。府中にあつたであろう国司に出仕するためにこの街道を通った。

**由良の戸（門）を渡る舟人
かじを絶え
ゆくえもしらぬ恋のみちかな**

（新古今集）
京都郊外三国峠（九五九メー

途中、由良石の採掘などもあって通行困難になり、古道が消滅してしまった。全国各地の歴史古道ブームもあつて、古道復活の願いが多くなってきた最近である。

さて、転勤で京都へ帰つていく藤原保昌と離別。山中の草庵にとどまつた式部は都へ出向くことも少なくなり、この地で生涯を終る。

京都中京区にある誠心院は、藤原道長から与えられた小堂だが、もう当時の都は藤原末期で荒れ放だい。

「情熱の歌人がひそかに住んだ草庵は二基の墓石が草むしていりだけだが丹後の人々はこの歌人の靈をひそかに抱いているのである。」

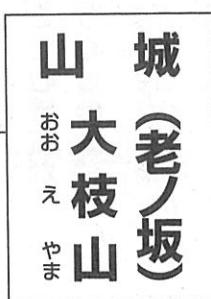
（水上勉著「丹波・丹後」河出書房新社刊より）

由良の峠の入口には、厨子王の柴刈りと三庄太夫の首ひきの碑が建つてゐる。

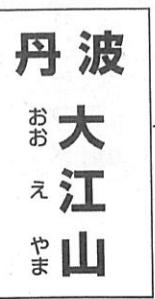
丹後巡礼ガイド 丹波越え 鬼のすみか二つの大江山

[コース]

京
都



いくの道



[要旨]

古代ヤマトの皇子婿入り鬼退治日子座王命は、青葉山→大江山。鬼は土蜘蛛、陸耳御笠。
聖德太子の異母兄弟麻呂子親王は、大江山→立岩。鬼は、英古・輕石・土車。
陰陽博士安倍清明が占い頼光退治の大江山は酒呑童子。京都一条戻り橋下で安倍清明が飼っていたのは大枝山の小鬼、渡辺綱の鬼は大枝山。
歌読み人の京都出たことない人は、大枝山。丹後へ向つた和泉式部は、大江山を「感謝の大山」と呼んだ。

丹後むかしばなし

みもり あきら

昔、栗田から由良への道は、今の国道がなかったので山道を通っていました。



しばらくすると、後ろで物音がするので、ふりむくと暗闇の中で、金色に光る目がみえます。

「狼に後をつけられている……」薬屋は山道を急ぎました。が、狼の数は二頭、三頭と、ふえて、声をあげて、追ってきました。

今にも狼に追いつかれてしまいます。

薬屋は、背中の荷物を降ろし傍らの松の木に登りました。

狼たちは、木を見上げて、いましたが、一頭が木に前足をついて立ち上り、別の狼が、その肩にのり、次々と上に乗つて、薬屋に迫ってきます。

でも全部が乗つても、薬屋には届きません。狼たちは相談をして「山道を降りた所に、田畠の茶屋がある。あそこのお婆を呼んでこよう」

「田畠のお婆？」その茶屋は、「ギヤーッ！」

山猫は、頭を切られて、木から転げ落ちました。

そうするうちに、東の空が白

ある日のこと、毎年、薬の置き換えに由良へやつてくる薬屋が、山道の途中まで来ると、日が暮れはじめました。

「今日は、日が落ちるのが早いのう」旅なれた薬屋も、すこし心細くなつてきました。



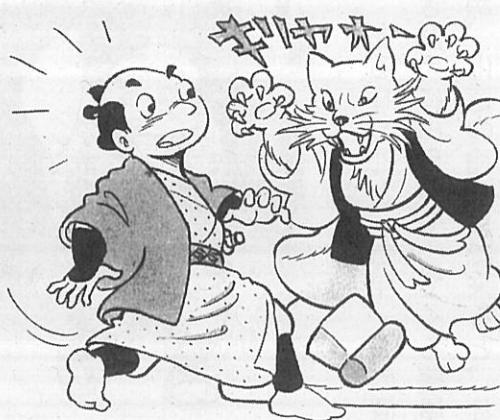
「田畠のお婆」というのは、お婆さんに化けた山猫でした。

山猫は、狼たちの上に乗つて薬屋に、飛びかかってきました。「えじきになつて、たまるか」

薬屋は、勇気をふりしぼって、護身用の脇差しで、山猫に切りつけます。

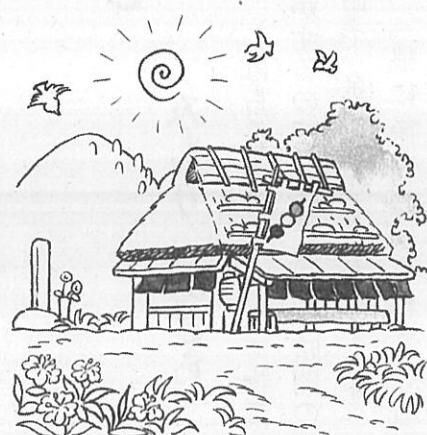
そうするうちに、東の空が白みはじめ、狼たちは、去つてゆき、全部いなくなりました。

夜が明けると、木から降りた薬屋は、田畠の茶屋へ行つてみました。



「お早うございます。お婆さんは、お達者ですか」と聞くと「けさは頭が痛いと云つて寝ていますよ」家の人人は心配そうに話します。茶屋は「いい薬がありますよ。私が診てみましょう」と、云いながら、お婆さんの部屋へ入りました。

お婆さんは頭に包帯をして寝ています。介抱するふりをして包帯をほどくと、頭には刀の切り傷が、ついていました。



由良小学校長 松本師正編纂
「由良地区のむかしばなし」より

参考文献

山猫は、田畠のお婆さんをたべて、お婆さんに化けていたのでした。

山猫は腰を抜かしています。
山猫の正体がわかつて、身がまえていた薬屋は、山猫を切り倒しました。「お、お婆……」家の人は腰を抜かしています。

「やつぱり昨夜の山猫だ」薬屋は、唐がらしのようないいにました。

「ン！ ギヤー！ ギヤー！」びつくりして正体を現した山猫は、山猫に飛びかかってきました。

川柳

坂本妙子

今年こそ期待していた

ジヤイアレツ

傘寿すぎもう若いとは
云えないが

ビンビンコロリで幕を
ひきたい

内心を秘めて切ない

会者定離

まだ迷う西方淨土

舞に迷う

年寄つて良いばあちゃんど
云はれたい

ならぬ堪忍するが堪忍
ひきたい

俳句

水引草

傘寿すぎまだ元気

卒寿造

故郷は銀河横たふ

恋の浜

丘に来て尽きぬ話や

天の河

老笑短歌

坂本妙子

流れ星輝くものなく
老ひにけり

廢村「嶽」探訪記

中 西 衛

平成二十三年四月三十日(土)
朝九時三十分に由良を出発。青木敏之先生、青木荒義さんと小生の三人、途中コンビニで昼食とジュースを買って十時に栗田に到着。藤原信弘氏（嶽村最後の住民）と出合つて、四人で軽トラック二台で十時に栗田を出ました。

三十分位走つて嶽村跡に到着しましたが、途中で新宮へ抜け道と田んぼへ引く水路の説明を受けました。廢村跡地へ足を入れて、藤原氏にくわしく案内してもらいました。最盛時は明治のころ十四戸だったが大正に入ると九戸に減り、昭和十年ごろには五戸になりました。昭和四十九年に落雷で一戸が全焼した。その家だけが藪下という名前で庄屋さんでした。

平家の物と思われる赤旗や鎧、兜があつて、夏には虫干し

をしていました。火事により全て焼失してしまったとのこと。昭和五十一年十月に藤原市蔵さん夫婦と藤原孝之助さんの一家四人がふもとへ下りて、住人ゼロとなりました。跡地に入るともう何もなくて、約五十坪位の平地が五、六ヶ所ありました。全部南の方を向いていて住み良いところだつたうと想像いたしました。電気は早くついたし、水は井戸を掘り、普通は下へ向いて掘るところをここでは横へ掘つたとの事でした。建物は完全に破壊して出たとの事ですが、廢村になつたという新聞記事が出てから、一二三週間くらいで、家に戻つてみると泥棒が入つていたそうです。十一時ごろになつたので嶽村を出て右の方の林の中へ入り、登つていきました。きれいに植林されていて、杉、檜が多く間伐した

ところや枝打ちしたところもありました。どんどん登つていきました。牛の放牧地だったという所には池成という池がありましたが水は少なくなつていきました。又その横に神田という神の田んぼ跡がありました。藤原さんのお父さんが、由良の人によ頼されて牛をつれて由良の田んぼの耕運をした事もあるといわれました。十二時半ごろになつたので頂上ちかくで昼食弁当を食べました。頂上の稜線は由良と栗田の境界でしょうか、黄色の杭が十数おき位に打ち込まれていました。その稜線に立つと右に由良、左に栗田が木の間より見えました。天の橋立もはつきり見えました。右は黒見谷のはずで私の家の山で、昭和三十五年位に、桧を植林したところですがはつきりとは確認出来ませんでした。少し稜線を下がつたところから左側、栗田側へ下りていきました。昨年、先



生がつけた赤いテープが見えて安心しました。登りの道と違つて、はつきりとした道がなく、田んぼの水があるところが多い、下りるのに苦労しました。樹令百年以上の杉の木を見たり、昨年立てた立板を見たりしながら、どんどん降りてきました。三時ごろになり、もう少しで到着という時に雷が鳴り、どうやら降りの雨となりました。ずぶぬれになり軽トラックに乗り込み由良まで帰つてきました。

中務先生との出会いに・・・

濱野路 大森 孝

(一)あの時の付添いの先生でしたか。紛れもない!

今、こうして、京阪樟葉駅のガード下の料理屋で、持唄の「田端義夫」の「奄美」の演歌をうたつた。他方の中務先生はPTAの催した私のための送別会の宴を、とりしきつていられる。副校长として、何十年ぶりに席を同じゆうして。お母さん方の多くは和やかな雰囲気でやめて行く私のために歓をつくしてくれているのだつた。涉外部の送別会なのだ。時恰も昭和から平成と改元された。

副校长には昔、忘れ難い感動を私はもつ。故郷の情景と二重写しとなる。則ち、濱野路公民館で、当時府立福知山高校の生徒達と、大鍋を後の庭に持ち出して、多人数に食事をつくり、西側の風呂を薪でたいてわかして、自炊で課外学習を指導して

いられたのを知っていたからである。

個人的な話に亘るので恐縮ですが、用務係りの管理の夫婦から『字』の会計担当をしていた私の父の岩吉のところへ、連泊の公民館使用料を査定してほしとの申し入れがあつて、父と両名で現場を見に行きました。(当時の私は府立学校の教員をしていましたが、夏期休暇で郷里由良の海水浴場で、家業の民宿を手伝っていました)。その先生、引率が中務先生とは、もとより知るよしもなく、たゞ同職の教師が一人で、とびまわっている姿をみながら感嘆しきり。加えて、福知山から海水浴によく来てくれたなアとそのサプライズに満身の感謝を捧げたい想いでいました。私にとって、この府立福知山高校の師弟のつながりみたいなことが果してでき

るであろうか。とも自問したり。その頃は館内はオープンで、今日よりずっと風通しのいい状態で閉塞はなかつた。

用務の老夫妻は公民館の道を隔てたすぐ隣りに居住していく、公民館の会計担当の父と収入については、それは縁で結ばれていました。

(二)縁は異なるもの味なもの。

これは男女の仲を指すことが多いようだが、彼、中務先生が木村校長のもとで、副校长となられた。彼の言によると、府立福知山高校勤務の頃、山が郷土由良、海水浴を生徒達と偕に体験して、止泊先が濱野路公民館だつたこと。そして、私が『字』の会計の件であつた事等

等は、知らない筈である。

私としては、あの時のあなたでしたかで、まさかのめぐりあわせである。こうして、料理屋の上を走る京阪電車の響きを聞き乍ら、人生にはこんな出逢いぱいでした。私にとって、この府立福知山高校の師弟のつながりみたいなことが果してでき

(三)月日は移ろう。

もはや在りし頃の濱野路公民館の姿はない。海水浴の客達も減つたし、丹後町の高名な旅館にぬきんでられて、さゝやかな一つの歴史となつたかもしだい。もう昔に戻ることはできないが、今は昔、繁栄していた国鉄宮津線の運んだ丹後最大の桃源郷だつた。特に京都府民にとつて桃源郷だつたと言えよう。

平成二十三年四月五日記

参考文献

(一)丹後由良の史跡
—由良の歴史年表。—

(二)イザベラ・バード著
『真説歴史の道』『日本奥地紀行』

小学館発行

歌つてよ、皆さんのお青春時代の
歌を、味わいながら

「アーアー、聞こえますか。」

そんな第一声とともに日本でラジオ放送が始まつたのは、一九二五年だから長い歴史である。

(一一〇一・五一・京都新聞・
朝刊一面コラム「凡語」より拝
借しました)

私自身歌を聞いてその歌詞を味わうことが、できるようになつたのは、ラジオからだつた
と思ひます。

「悲しくてやりきれない」と
いう歌を皆さんには、御存じで
しょうか、私の世代なら知らな

い者は、いないのではないかと思う十年に一度の名曲であります。(歌・フォーク・クルセイダー)

ズ)「悲しくてやりきれない」は、私のつたない解釈を少し加えるなら、誰もが持っている悲しさや、寂しさ、切なさ、そして孤

小西衛

独感などを綴った歌でありますけれど、私自身が悲しくなつた時などに悲しい歌（曲と詞）を聴くと、どことなく心が共感しながら、和らいでくるのです。そんなことって皆さんもありますよね。

寂しくなつた時でも寂しい場所に行つた方が（ひとりぼっちの由良浜海岸、ひとりぼっちの由良神社、雨の日のひとりぼっちの散歩）かえつて自然の中に身を任している方が、寂しさを和らげてくれますでしょ。

そんなことつてありますよね、皆さんだって、私もやっぱ
り皆さんと同じ寂しがりやな人間なのかも知れません。

寂しさを“心の友”として明るく元気に生きましょうか。昔、新聞にこのような文章が書かれていました。

「本・音楽・映画・酒・慰め方は人それぞれだろう。へひた走るわが道暗ししんしんと悚へかねたるわが道くらし／と斎藤茂吉の歌にあるが、人は誰もが無理やりにでも私が身を慰めながら人生の暗い道を走つている。東京・秋葉原で七人を殺害した通り魔の男は、二十五才、滝廉太郎や樋口一葉の没年を起えていた。彼女のいない焦り、職場へのうつ憤、敗北感、孤独感……。男が携帯サイトの掲示板につづった悩みがどれも、ごくありふれたものであることに拍子抜けした。「誰かが見て、自分で止めほしかった」警察の取り調べに男は、掲示板に書き込んだときの気持ちをそう語つたという。甘ったれるんじやない。」（二〇〇八・六・一三・読売新聞・朝刊一面コラム「編集手帳」より拝借しました）

りして、歌をたくさん聴いていますけれども、この歌は、すばらしくいいと思ったものは、すっかり本当のところを知りたくて訳が書いてあるものを、本屋で探したり、知人に問い合わせたりすることも当然ありますしよ。よっぽど好きな歌に限りますが。

♪ “人が幸せになるのを、批判する権利は誰にもないし、誰もが皆んな幸せになつていいくんだと、ただし他人を傷つけなければね” ビートルズは歌つています。

最後に私の青春時代は、経済成長が真っ最中の時期で「ジャパン・アズ・ナンバーワン」という本がよく売れていたことも覚えていています。しかしながら、私の下宿部屋は、かぐや姫の南こうせつ君が歌つているとおり、三畳ひと間でマメ電球、煎餅布団などなど、での生活だったのですから、桃源郷（ユートピア）的な歌は聴けるはずもなかつたのです。私達、八十年

代に青春時代を送った者は生活の中でのラブソング、暮らし、生きざま、生活の中での夢など、社会人になるためのモラトリアムな歌が私達の心を捉えた時代でありました。又、テレビでは、「俺たちの旅」(日本テレビ系)に下宿人十人が夢中でくいいるように見てました。

皆さんは、どのような歌で、

“青春”されましたか、若い方々は“今”どのような歌で“青春”していますか。

“歌は世につれ 世は歌につれ”ですか。

私自身、あんだけ苦しい青春時代だったにもかかわらず、今言える言葉は“昔は、よかつた”であります。

若狭越前海岸を歩く (No.7)

港四方俊一

敦賀(つるが)(角鹿)(つのが)は北陸七ヶ国(えちせん)
越前・加賀・越中・能登・越後(えちぜき)
佐渡・睦(むつ)の入口として愛(あい)い
発関(文化二年六四六)が置かれた。こゝで日本地図を北を南に、南を北にして見てみよう。私達は地図を見るとき北を上にして見るのが常である、それを逆にして見るのも一方法である。ロシア側から日本を見ると中央部分にリアス式海岸の若

狭湾が目に付く、大和の都に近く舟の出入が容易な海岸は天橋立から敦賀を含む若狭湾であった。この湾に目をつけたのが渤海國(朝鮮半島北部・中国東北部)百濟(朝鮮南部)新羅(朝鮮中部)からの渡来民であった。以後東南アジアの国々も若狭湾を利用することとなる。そして松原客館(交通の要地に外国の使

節を迎える館)も設けられていた。東北・北陸の産物を都へ運ぶには陸路か、海路の方法が必要であった。そこで北陸道は古く敦賀湾沿いの五幡(北陸自動車道の越坂トンネルを抜けた所から一望できる海岸迄一帯)、杉津(河野海岸道路分岐点)を経て山中峠を越えた。大伴家持が「かえるみの道行かむ日は五幡の坂に袖振れわれを思はば」と万葉集に詠んでいる五幡の坂が山中峠を越える道であると云う。平安期に入ると、天頂年間(八二四~八三四)に鹿蒜保(かひるほ)嶮道が開発される。紫式部が越前の国府(昔、都が置かれた所)から京の都へ上の時「呼び坂」を登つて「帰山」を越えた「紫式部集」に出ていて、「帰山」が「木ノ芽峠」と云われ、「呼び坂」は「乙女の呼び坂」と云われる寂しい山道で、しかも嶮路であったとされ、その木ノ芽峠が開削されてから木の芽峠越

が主道となつたのである。「山中峠」と「木ノ芽峠」と平行して「柄ノ木峠」がある。それは北国街道(国道三六五号線滋賀県北部の小谷城下を通り福井県に入る道路)であり、柄ノ木峠を越える道で「源平盛衰記」には、木曾義仲の軍勢を打つため、平家軍はこの峠を越えて「燧城」(福井県今庄町)へ攻めたとしている。戦国時代の元亀の頃(一五七〇~一五七三)、織田信長と浅井長政、朝倉義景連合軍との合戦には「木ノ芽峠」と「柄ノ木峠」が使われた。元



みもり あきら 絵

亀元年、織田信長が越前朝倉義景攻めの時、義弟の浅井長政の背反に合い、退却を余儀なくされ、織田信長は朽木越（九里半越→保坂→桧峠→朽木谷）を通つて京都に帰還する。しんがりを努めていた徳川家康の軍が敦賀から西の小浜に迂回して針畑越えで朽木谷に出て帰京する一幕もあつた。その十年後、天正十一年（一五八三）の秀吉と柴田勝家との合戦には柄ノ木峠越が主となつてゐる。そして二二一年後の江戸末期元治元年（一八六四）十二月十日、木ノ芽峠を越えてきた武田耕雲斎（幕末の尊攘派の志士。水戸藩士、元治元年筑波山に挙兵、天狗党を率いて西上途中）、藤田小四郎（幕末の尊攘志士）率いる水戸天狗党八百名余りが峠下の新保村（敦賀市新保町）で雪のため前進を阻まれ、暫く新保で逗留していたが、追討各藩に包囲されて加賀藩に降伏した。翌、二年二月敦賀でことご

とく処刑された。その遺跡が松原に今も残る。このように軍事用、荷物の船送、旅人の通行に「木ノ芽峠」「栎ノ木峠」、「山中峠」は古来より重要視されてきた。さて先程の地図を逆にして見ると日本海の中心は若狭湾であり、敦賀から宮津（由良）迄平安京に最も近く、しかもリアス式海岸で港として活用するには最適の土地である。一方では都近くまで水路が有り、一部分陸送するのみである。そこで敦賀～琵琶湖間運河開削計画であり、由良川開削計画であつた。琵琶湖～敦賀間の開削計画は平清盛が最初に計画し着工したと云う。江戸時代に橘南溪によつて書れた「北窓瑣談」の中に「平清盛、小松内府（重盛）に命じ、近江国琵琶湖を北海（日本海）に切り落し、新田を開かんとす。敦賀へ越える道中、塩津の山中深坂」というところにその切り開かれし跡、今に残れり」という件がある。当時

(一一三八~一二七九) 国司(平重盛)が越前で産する米・金・鉄を大量に京都へ運び込み、ゆらぎ始めた平家一門の財政を立て直すのが狙いであつた。運河は平家滅亡によつて未完成のまま終つたが、もし出来上がっていたら、日本最初の列島改造として評価され、後世の歴史もがらりと変つた方向に進んでいたかも知れない。その後、計画は天正十一年(一五八三)から十七年(一五八九)迄敦賀城主であつた蜂屋頼隆、十七年から慶長五年(一六〇〇)迄城主であつた大谷吉継の兩人によつて運河計画がたてられたと伝えられてゐる。以後、昭和三十八年、大野伴睦を中心とする自民党国會議員の有志百数拾名による運河計画迄十六回に及んだが成し得る事が出来なかつた。その要因は、掘削に多大の費用を要したこと。彦根藩と小浜藩の対立があつた事、彦根藩としては彦根城の堀の水が下がつて城



みもり あきら 絵

周辺の水田の水が干上つて米が作れなくなる事、米が減収する事により京都への米供給が減少し彦根藩の減収になる事から阻止派として彦根藩主、井伊直弼そして老中堀田正睦その他勘定奉行、京都東町奉行等が嘉永六年（一八五三）～安政六年（一八五九）にかけて猛反対したのであった。推進派は小浜藩主酒井忠義、老中阿部正弘、京都西町奉行等々である。北陸、塩津迄陸送したが一方寛文十一

年（一六七一）幕府の命を受けた河村瑞賢が日本海の「西廻り航路」を開いたのである。敦賀運河が困難となると注目を集めたのが「由良川水運」であった。それ迄、細々として進められていた水運が注目され始めた。由良湊から福知山迄標高差は殆ど無く、由良川は物資運搬に格好の水路であった。福知山に至れば更に船を変えて綾部の高津へ、そして綾部井堰迄運び、その井堰を越して「和知、下山」の赤瀬橋（前国道二七号線）で物資を降して胡麻川（JR胡麻駅裏を流れる川）迄陸送して再び船積して「吉富」で「園部川」に合流し保津峠から京都に入り更には桂川を経て淀川に入り「浪速」に入った。又福知山で陸揚げされた荷は塩津峠を経て黒井から加古川を下り播磨灘に至る行程と福知山の口 横原から馬で峠を越え青垣町に出で加古川の上流を船で下り、河口の高砂で大型船に積

み替え浪速に向う行程があつた。丹後由良から福知山迄は五十石船、福知山から高津迄は二十石船、更に上流へは高瀬船を使用した。由良川水運に関して元禄十三年（一七〇〇）から文政十一年（一八二八）の間に八回にわたり河川の開削と通船の願いが出されたが届かず不調に終つた。その要因は、流域の村々が上りの船を引く労力の提供を断つたことや、荷物の減少を恐れた敦賀・若狭側の反対で実現しなかつた。「若狭側」と云うのは小浜ルートである。小浜で陸揚げされた北前船の荷物は北河を逆のぼり熊川宿迄運ばれ琵琶湖への中継地となり京都・大阪迄運送された。「熊川宿」には四百頭の馬が居たと云う。小浜で降された荷物は川船に積変えて運ぶわけだがそれは人力によつて引つ張るのであるが、一船に十駄分乗せた。一駄が五斗俵を三俵であるから

二千二百五〇キロの米を乗せ三人の船指（船頭？）船引十三人制が確立すると北陸諸藩は年貢米の分まで外販売（藩外へ販売）を急増させ敦賀を中心としたため、諸藩の藏宿は敦賀商人の手に集中し、輸送・販売を一手に握つた。万治・寛文年間（一六五八～一六七三）の敦賀の問屋数は売り問屋百八〇軒・買い問屋百六〇軒の多さに達した。敦賀港入港船舶は二千六百七〇艘と増え、取扱量も米七拾五万六千俵、大豆十万俵、海産物、塩物（干物）、紅花（染料）等があつた。下り荷は敦賀船が独占積荷する特権を持つていた。小浜藩は上方（京都・大阪）に送られる荷物に対して通貨税を課し、その年収は敦賀港だけで最盛期の寛文四年（一六六四）には五七〇〇両（現在の金にして百五〇億円程）となり藩の財政を大いに潤しました。しかし河村瑞賢の西廻り

氏・高島氏（豪商）はその力の大きさを感じさせ、徳川幕藩体制が確立すると北陸諸藩は年貢米の分まで外販売（藩外へ販売）を急増させ敦賀を中心としたため、諸藩の藏宿は敦賀商人の手に集中し、輸送・販売を一手に握つた。万治・寛文年間（一六五八～一六七三）の敦賀の問屋数は売り問屋百八〇軒・買い問屋百六〇軒の多さに達した。敦賀港入港船舶は二千六百七〇艘と増え、取扱量も米七拾五万六千俵、大豆十万俵、海産物、塩物（干物）、紅花（染料）等があつた。下り荷は敦賀船が独占積荷する特権を持つていた。小浜藩は上方（京都・大阪）に送られる荷物に対して通貨税を課し、その年収は敦賀港だけで最盛期の寛文四年（一六六四）には五七〇〇両（現在の金にして百五〇億円程）となり藩の財政を大いに潤しました。しかし河村瑞賢の西廻り

きく半減した。「敦賀—梅津—大津—京都」の流通ルートが寂れるならば沿道の商人・輸送業者・一般民衆迄もが、ことごとく生計の道を失つて由ゆしい社会問題となるうえ、北国方面への必需物資供給にも重大な障害となると云うものだが幕府はこれを無視した。それは「北陸—京都」の陸送ルートが、小浜藩の通貨税徴収を始め、何段階もいたことによる。例えば新潟から米百石を大阪に送るのに、敦賀経由では二二石三斗八升の諸経費が掛かるのに対し、日本海を西進して下関から瀬戸内海に入り、大阪に直航すれば十九石の船貨で済んでいた。西廻りの海運の発達によって苦境に陥った敦賀、小浜の商人達は自ら北前船で日本海に乗り出して奥羽（東北）蝦夷地（北海道）と上方との交易を行なう海商となることで活路を見い出した。当時の由良湊も同様、勇気のある人

間は各々廻船問屋の船乗りとなり船頭を務める様になつた。由良の船頭の操船術は巧みで各地廻船問屋の評判は好評であつた。又、敦賀は北前船の造船所の有つた所でもあり、資本金は近江商人が出資し、造船所の大工は小浜の大工であり、材料は丹後の木材が使用されていた。それは丹後の材木屋、丹後嘉平次・丹後木清から材木を仕入れ、しかも船の重要な部分（船底等）に使われていた。當時由良川の石浦附近に貯木場があり多くの材木が運び出されたのである。近代敦賀港の黎明は、明治三二年（一八九九）の開港場指定であり、これによつて再び日本海海運に雄飛することになつた。帝政ロシアは明治三九年（一九〇六）敦賀とウラジオストック間に定期航路を開設してシベリア鉄道と結び、函館領事館の副領事を常駐させたが、革命後のソ連も又、この地に領事館（一国を代表し自国の經濟

的利益と在留民の利益の保護にある所）を第二次大戦が終る迄置いた。この頃（一九一〇）ア語の看板が目立ち、旧制の県立商業学校には全校の中等学校では唯一、ロシア語科が正科としておかれていたのも日露貿易に情熱を傾けた「敦賀人」の意を示すものである。こゝで前に記した大野伴睦（一八九〇—一九六四）氏の大運河計画は中部経済圏の発展を願つて昭和三七年頃から中部横断運河（敦賀と伊勢湾を結ぶ計画）の構想がたてられた。これは敦賀から塩津迄水路をつけ、塩津から長浜迄は琵琶湖を利用し、岐阜県海津（岐阜県南西部、長良川・揖斐川間の高須輪中）にある町、旧城下町、稻作が中心・人口一万四百七一人まで水路をつけて、海津から桑名（三重県北部の市、旧城下町、ハマグリのしぐれ煮が名産人口十万程）迄は揖斐川を利用すると云う壮大な

計画であつた。自民党副総裁大野伴睦は丁度その時岐阜の水田の中に新幹線羽島駅を誘致し勢いに乗つっていた。彼が会長となり日本横断運河建設議員連盟・商社、回船業・ホテル等はロシア語の看板が目立ち、旧制の県立商業学校には全校の中等学校が結成され、関係各県と共に中央政界に働きかけていた。しかし総事業費三四八〇億円、工事期間十五年といつたことから着工には至らなかつた。この計画が巨大な工事費を要するにも拘わらず、実現してもエジプト運河（エジプトの運河）やパナマ運河（中南米の運河）のような経済的効果を生まないことから経済的理由からいはずれも成功に至らず、幻の運河計画に終つた。と考へられる。大野伴睦と云えば衆議院議長を二期務め副総裁と云う大ボスであつた。その彼にしても成し得なかつた事業で平清盛以来十六回に及んだのであつた。敦賀北前船と琵琶湖水運にはまだまだ書く事があるが次の幾会に譲ることとする。さ

て日が暮れぬ内に次の宿場に足を伸ばしたい。敦賀セメント工場（この工場の石灰を江戸時代末期、由良の磯部丸が積荷し出雲崎まで運んだ記録がある）前の八号線を通り鞠山トンネルを過ぎると赤崎である。現在は赤崎海水浴場であるが江戸中期は製塩事業が盛んで赤崎塩として有名であったと聞く。河野村迄は少々時間が必要だ、この辺の海辺でキャンプでもするか、と云う訳で携帶用一人天幕を張り、休憩する。敦賀半島に陽が落ちる頃、即席ラーメンで夕食を取る、太陽が西に沈む、半島の馬背峠附近に真っ赤な夕陽が落ちて行く。明日は早い五時起床で出発準備である、早々に就寝する、疲れのため寝付きは早い。

つづく

ちーと知つ得

由良神社遷座
由良神社は皆さんよくご存じのことですが、以前は由良岳を向いて建っていました。

大正六年に現在の海方向にな



りましたが、その時に狛犬や鳥居、そして石灯籠、道路に面した石垣等が奉獻されました。
大鳥居は、奈具海岸から十数頭の牛に挽かせて運んだといわれています。

(飯澤)

編集後記

2011 (H23) 6月

四月になつても寒い日が続き四寒三温の逆となつた。

駅前の桜が散り、中旬になり由良ヶ嶽の整備の登る頃、やつと春らしくなってきた。

毎年、観光組合の方々と四月二十九日の登山日に備え整備に上がる。

今年の大雪と寒波の襲来で稜線の一尺ほどの肝木も中ほどから折れてチエンソーオの出番となつた。春は、ウドタラの芽など山菜が香りを添えて美味しくなる。やはり、冬より春が良い。

一斉登山日は一五三名の参加で事故もなく無事終了した。時の移ろいの中で、變つてゆくものと變らないものがある。變わらないのが「生涯学習」です。これは公民館に課せられた課題もある。

人と云うのは何事においても日々勉強しなければならないということだと理解している。

(枝川)